

日本語疑問文の歴史変化—近世以降を中心に—

衣畑智秀 (福岡大学)

tkinuhata@cis.fukuoka-u.ac.jp

1 はじめに

中世末までの日本語疑問文の歴史変化について、衣畑 (2014) では、疑問助詞の分布に着目し、疑問詞疑問文と肯定疑問文が区別される形で変化が進んでいると主張している。たとえば、中世末には、文末の力の有無によって疑問詞疑問文と肯定疑問文が区別される^{*1}。

- (1) 男「いかやうなるおかたで御ざるぞ。福の神「某をぞ知らぬか」 (虎明狂言・夷大黒)

一方、現代共通語では、「質問」(2-a)の肯定疑問文で文末力の使用が義務的ではなく、むしろ力がない方が自然である。また「自問」(2-b)の疑問詞疑問文では、肯定疑問文と比べても、文末力の使用に不自然さはない。

- (2) a. (あなたは) 何を食べるの (*か) ? / (あなたは) 蕎麦を食べるの (? か) ?

- b. 部長は何を食べるのだろう (か) ? / 部長は蕎麦を食べるのだろうか ?

よって、近世以降の疑問文には非丁寧体において次の2点の変化が起きたことが分かる。

- (3) a. 「質問」の肯定疑問文で文末力を使わなくてもよいようになる。

- b. 「自問」の疑問詞疑問文で文末力を使えるようになる。

このうち(3-a)の肯定疑問文の変化については、近世の文献に疑問符のような記号がないために力がいられる可能性があり、文献で実証するのが難しい(5節)。そこで本稿では(3-b)の変化に焦点を当て、その変化を文献から実証的に示す。その上で、疑問文の体系的な変化についても考察を加える。

2 データ収集

疑問詞疑問文で力が使われるようになる過程を『日本語歴史コーパス』を用いて調査した^{*2}。

『日本語歴史コーパス』では「疑問文」のような文タイプでの検索ができないため、資料中に見られる疑問詞から基礎となるデータを作成するという方

法を取った。本稿で抽出したのは「品詞」が「代名詞」「形状詞—一般」「連体詞」「副詞」「名詞—数詞」に分類されているものであり^{*3}、検索結果をダウンロードした後、語彙素をもとに疑問詞と確認できるものを抽出した。この中には、後で触れる間接疑問節で使われるもの、「誰か」「何か」のように不定代名詞となるもの、「誰も」「何も」のように助詞モによって全称量化詞になるもの、呼びかけとして用いられるもの(「いかにひめ、さうさう / いでよ」虎明狂言)、感嘆詞なもの(「何のマア、仰山らしい」人情本)など、文タイプと関係のないものも混ざっており、目で見て除いた。さらにここから話し相手の疑問文をそのまま繰り返しているものと、係り結びと文末ヤの例を除いた^{*4}。以上によって得られた疑問文の用例数を、疑問詞の総数とともに表1に示す。

表1 疑問詞疑問文用例数

	狂言	近松	洒落	人情	明治
疑問詞総数	2136	1821	2689	1290	1135
疑問文の数	983	835	885	388	218

^{*1} ただし、キリシタン資料や『捷解新語』のような外国語資料には、疑問詞疑問文の文末に力が使われることが山口 (1990, 6章) や阪倉 (1993, 4章) に指摘されている。『天草版平家物語』の調査については清水 (1995)、竹村・金水 (2014) など参照。

^{*2} 検索したサブコーパスは以下の通り。狂言 (室町時代編 I)、近松浄瑠璃 (江戸時代編 III)、洒落本 (江戸時代編 I)、人情本 (江戸時代編 II、コアのみ)、明治初期口語資料 (明治・大正編 III)。狂言、洒落本はバージョン 2018.3、それ以外はバージョン 2020.3。

^{*3} 「何者 (ナニモノ)」「何方 (イズカタ)」「何事 (ナニゴト)」「何時 (ナンドキ)」「何時頃 (イツゴロ)」「何程 (ナニホド)」のような複合語は「名詞—普通名詞—一般」に分類されており、データには入っていない。

^{*4} 疑問助詞やと係り結びは文語文法と考え除いたが、これらの特徴以外から文語と判断できそうなものは除かなかった。それは特に、浄瑠璃のような芸能では文語部分と口語部分を区別することが困難なこと、また、もともと疑問詞疑問文で文末力は使われなかったためそれが文語に現れたとしても新しい特徴と見なせること、などの理由による。

3 調査結果

3.1 用例の分類と結果

2節の手続きによって集めた疑問詞疑問文の用例を、疑問文の用いられる文脈と、使われる疑問の助詞によって分類した。文脈として「質問」「自問」「反語」の3つを考えた。「反語」は、対話者（聞き手がいる場合は話し手と聞き手）が疑問文の答えを知っているにも関わらず、いわば修辭的に疑問文を用いているものである。よって(4-b)のような肯定的な答えになるものも分類されている。よって答えが否定的になる(4-a)のような例だけでなく、(4-b)のような肯定的な答えになるものも分類されている。

- (4) a. あの群衆の中へ、誰がこふぞ（＝誰も来ない）。むさとした事をないハしまつそ。（狂言・川上）
b. 某もはらがたつて、『雨のふる夜に、たがぬれてこうづらう（＝私が来る）に、たそよと、とがむるハ、人ふたり待身か』（狂言・花子）

一方、「質問」と「自問」は話し手が答えを知らないものである*5。この中で、尋ねている相手がいる場合を「質問」、尋ねている相手がいない場合を「自問」とした*6。

以上の3つの文脈それぞれにどのような疑問助詞が文末に使われているかを示したのが表2である。表2では、洒落本を「上方」（京都・大阪）と「江戸」で出版されたものに分けた。それぞれの文献の合計数は表1に一致する。疑問助詞には、カ、ヤラ、ツケの3つを認めた（ただし、ツケは江戸洒落本の3例のみ）。「無」には文末にゾがあるものも含めた。

表2 疑問文の分類結果

		狂言	近松	上方洒	江戸洒	人情	明治
質問	カ	1	1	2	5	0	5
	ヤラ/ツケ	2	0	0	3	0	0
	無	652	284	338	276	214	73
自問	カ	0	***23	***10	***9	***20	***23
	ヤラ	10	27	20	6	10	7
	無	172	208	42	24	36	70
反語	カ	*3	3	**6	3	***27	***14
	ヤラ	0	1	0	0	2	0
	無	143	288	83	58	79	26

た。狂言では文末にゾがある例の方が多いが、近松以降はないものの方が多い。

表2から文末カの使用が時代ともに増えていくの分かる(4節)*7。また、疑問助詞の付く例の割合は、自問、反語に大きく傾いていることが分かる。フィッシャーの正確確率検定（以下全て統計処理はR core team (2019)による）を用いて、各文献における、質問に対する自問、質問に対する反語へのカの偏りをそれぞれ検定すると、表2の「自問・カ」「反語・カ」に示したような有意差が確認された（全て $df = 1$ 、* $p < 5\%$ 、** $p < 1\%$ 、*** $p < 0.1\%$ でそれぞれ有意）。反語は文献によってばらつきがあるが人情本以降、自問は近松以降、カに大きく偏っていることが分かる。これは、カの意味的性質がカの用いられる文脈に大きな偏りを生んでいると解釈される。

*5 たとえば文章の書き手が読者の立場に立って疑問文を使った場合、実際の発話者（＝書き手）は答えを知っていることになるが、疑問を持っており想定される「話し手」（＝読み手）はやはり答えを知らないことになる。クイズの疑問文（実際の発話者は答えを知っており聞き手は知らない）はこの聞き手の立場からの疑問文を利用したものと考えられる。

*6 現代共通語のカの分布を考えると、尋ねる相手がいる場合でも、聞き手が答えを知らないと話し手が考えている場合には、尋ねる相手がいない典型的な自問と同じ形式を使うことができる。

i) (2人でドライブして道に迷い) ねえ、この道どこに行くんだろうか？
よって自問の定義を、話し手が聞き手から答えを期待していない場合、のようにした方が、現代共通語のカの分布は捉えやすいが、文献に現れる個々の用例について話し手が聞き手の知識をどのように見積もっているかによって分類するのは極めて困難である。よって、より簡略化した尋ねる相手がいるかないかをここでの質問と自問の定義とした。

*7 近世後期に疑問詞疑問文で使われる文末カが増えるということについては、山口 (1990, 6章) に短い指摘があるが、実証的な数値は示されていない。堀崎 (1995)、小野 (1998) では、洒落本や人情本の調査結果を示し、疑問詞疑問文の「疑い」に独自の形式として文末カを整理しているが、経年的な調査はされていない。

3.2 各文献の疑問助詞力

3.2.1 虎明狂言

虎明狂言で文末カが疑問詞疑問文に用いられている例の候補として、本調査では以下の4例が見つかった。(5-a)～(5-c)が反語で、(5-d)が質問で使われる例である。

- (5) a. さて / \ そなたはれうじな事をした、**何**として芸が其様に俄になる物か、(八幡の前)
- b. おんながはらをたておつて、わらハにかぶりつくやうにしおるハ、**なに**とこれがうそか (鏡男)
- c. いしやうよろづも、たくさんにあらハそうじやともおもふが、**何**として二三日や四五日で、そのこしらへがなるものでおじやるか (髭櫓)
- d. 夫 **い**かなるか是、しらきのしゆじやう 出家「うるしなけれハゑぬらずして (拄杖)

(5-b)は文脈から「どうしてこれが嘘なものか」という1つの反語的疑問文と解釈したが、「なにと」と「これがうそか」を別の文と解釈する余地もある。また(5-d)は、拄杖の受け渡し場面でのやや古風な言葉によるやり取りであり、擬古的な係り結びの力の影響も考えられる。たとえこれらを入れたとしても、疑問詞疑問文で文末カが用いられることは極めて稀であることには変わらない。

3.2.2 近松浄瑠璃

近松浄瑠璃では、疑問詞疑問文で文末カが用いられる例が27例見つかった。27例中23例が(6-a)～(6-c)のような自問で使われる例だが、(6-c)のように「どうかかうか」(あるいは「どうせうかかうせうか」という固定的な表現が7例見られた。

- (6) a. 浅疵とは聞いたれども、人の生き身、**どう**あらうかと親の案じはどう思ふ (山崎与次兵衛寿の門松)
- b. **誰**かとこそ思うたれ、与兵衛様か (女殺油地獄)
- c. 棚の側も離れがたく座敷へ叔母も呼びがたく、**どう**かかうか (心中刃は氷の朔日)
- d. 南無阿弥陀仏、南無阿弥陀。**い**かなる人の何故に刃の上の往生か。... 語り給へ、(薩摩歌)

(6-d)は唯一質問の文脈で用いられるものとした例だが、発話時点で聞き手はおらず、僧が海の中に向かって語りかけるという点で、典型的な質問らしくない例である。

3.2.3 上方洒落本

疑問詞疑問文の質問で、文末のカが使いにくいことを1節で見たが、質問に分類した2例はいずれも「北華通情」の同じ場面で同一話者「ほく」によって使われているものである。よってこのカの使用には位相差が関わる可能性がある。

- (7) a. きた「それにまひとつおかしい事がある ほく **なに**か きた「... かの閨中で可也といふ事をいひ上げな
- b. きん「そんならカノ状のおくにはいつでも歌かいておこすであらふ きた「さやうサ ほく「手跡はどうか

3.2.4 江戸洒落本

江戸で出版された洒落本の特徴としては、質問で文末カが使われた例が5例見られることである。その5例中4例は次のように丁寧体で用いられるものである。

- (8) a. そんな思ひも附いせん事を。まア**此所**^{どこ}からお聞なんしたか。(花街鑑)
- b. 三 **ナゼ**呑なんせんかへ 後アイねつから上りません (甲駅新話)
- c. 幸 そんなら。こふするのへ 琴**どふ**で。ありいすか (南閨雑話)

本稿では調査資料の制約から、丁寧体の疑問詞疑問文の文末にカが使われるようになる過程を実証的に

追うことは難しいが、この資料の状況はその萌芽を示している可能性がある。

3.2.5 人情本

人情本では、反語の増え方が大きい。反語で用例が増える要因には、次のようにモノカという形が盛んに使われることがあり、27 例中 22 例がこの形である。

- (9) a. さうさわたしの様な不意気な野郎はどこの国にあるものか。(仮名文章娘節用)
 b. 併お前様も真直にお帰ン被成ヨ 惣「あたりめへヨ。何処へ寄る処があるものか (春色江戸紫)
 c. どうしてマア伝兵へさんと、そんないやらしい事が有ますものか。一ツ所に居た時さへ。まじめで暮した吾儕の事。(恋の花染)

3.2.6 明治初期口語資料

文末カの例が自問、反語に偏るのは人情本と同様だが、質問での例も 5 例見られる。質問の 5 例のうち 2 例は丁寧体のものだが、3 例は非丁寧体の例である。後者のうちの 2 例は同一文献の似たような文脈で使われている。

- (10) a. 角「そんなら学問しての功能と云はどんな者かね」文「サアそこがね学問といふは、先比例術といふが第一で、(文明田舎問答)
 b. 田「... そんなら其太陽暦には、一体どんな利益があるかね」文「イヤそりやアモウ大造いゝ理屈があるわ、(文明田舎問答)

これらは、旧態を好む「究竟の頑固連」が「文明先生」に文明開化の意義を問い糺すところである。質問的文脈であえて積極的に尋ねるための形式ではない文末カを用いることで、否定的、高圧的なニュアンスを生み出しているのではないか。

4 モデルと予測

まず、質問、自問、反語それぞれの文脈において、100 例当たりの出現数を計算し、その合計値 (300 例当たりの文末カの出現数) を目的変数とする。次に、説明変数と

表 3 目的変数と説明変数

	狂言	近松	上方酒	江戸酒	人情	明治
出現数 (対 300 例)	2	10	21	30	55	61
年代	1600	1712	1791	1787	1838	1874
地域	west	west	west	east	east	east

して、資料年代と地域 (京阪か東京か) を考える。年代は『日本語歴史コーパス』の検索結果にも反映される「出版年」を平均した値であるが、虎明狂言については仮に 1600 年とした。このデータをまとめたのが表 3 である。

表 3 のデータを最もよく説明するロジスティック回帰モデル (cf. 横山・真田 2007) を、環境収容力 (上限値) を仮に 1/4 とし、R 言語の glm 関数を用いて計算した。ただし、データの推移を見た上で、出現数の上限値を全体の 1/4 (つまり 300 例中 75 例) とした。その結果得られた値をロジスティック関数の係数と切片に用いた式を(11) に示す (p はカの出現率、 x が時間の変数、 y が地域の変数)。

$$(11) p = \frac{1}{1 + e^{-(0.01727x - 0.70953y - 30.98751)}}$$

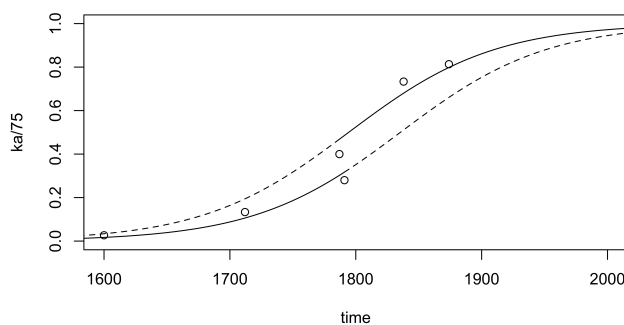


図 1 ロジスティック回帰モデルによる文末カの出現率推移

図 1 の下が京阪方言、上が江戸・東京方言の変化の予測である。決定係数 $r^2 = 0.9804$ となり、データを

よく説明しているのが分かる。どちらの方言も、文末カの使用率は1700年まで微増にすぎないが、1700年を過ぎてから曲線が上昇し始める。江戸・東京方言では1900年まで大きく上昇しその後ゆるやかな増加に転じる一方、京阪方言の上昇はやや遅れ、18世紀半ばから20世紀半ばにかけ上昇率が上がっている。このようなS字曲線は言語変化によく当てはまることが知られており（Aitchison 1991）、文末カの増加も自然な言語変化として捉えられることが示されている。

年代と地域の変数の p 値は、年代が $p = 1.55e - 09$ 、地域が $p = 0.025$ であり、前者が 0.1% 水準で有意なのに対し、後者は5%水準で有意になっている。よって、どちらもデータを説明するのに有効であるが、より年代による違いがデータの予測に決め手になっているのが分かる。

5 変化についての考察

衣畑 (2021) は、カによる間接疑問文の成立が直接疑問文に影響を与えていると考えている。

表4は、本稿で調査した範囲で
のカによる間接疑問文の用例数
であり、ゾ・ヤラ・無助詞による
ものを比較の参考にして示した
ものである。(12-a) がカによる
間接疑問文の例、(12-b) がカに代わる位置 (∅ で示す) に助詞がない例である。

表4 カによる間接疑問節

		狂言	近松	上方酒	江戸酒	人情	明治
間接疑問文	ゾ・ヤラ・無	44	26	34	2	6	19
	カ	0	5	6	12	33	25
直接疑問文	カ	4	27	18	17	47	42

(12) a. アノネ初会に出へしたお客ゆへ、**何ン**とおつせへすか知りイせんから。(花街寿々女)

b. アイエ、ゝすかんこん夜こぬはづじやに **どふ**してきた∅しらぬ。(新月花余情)

表4のカによる間接疑問文とそれ以外によるものとの比較により、前者が資料の年代とともに増加していくのが分かる。また、下の行に再掲した直接疑問文の用例の合計数との間には強い相関があり ($r = 0.9129857$)、互いに何らかの影響関係にあると見るのが自然である。しかし、用例数から見て、カによる間接疑問文が直接疑問文の変化を引き起こしたとは考えにくく、強い相関は、これらに共通した変化が起こったことを示唆している。

直接疑問文の文末カが自問に偏ること (1 節)、間接疑問文も (12) のように聞き手に問いかける構文ではないことから、本発表では、近世の初期に、カに「聞き手に対して積極的に答えを求める性質」(以下<問いかけ性>と呼ぶ) を失う (13) のような変化が起こったと考える。

(13) [±問いかけ] > [-問いかけ]

この[-問いかけ]はカという形態素が持つ意味的な性質であり、直接確かめることはできないが、質問や自問、反語といった疑問文が使われる文脈への出現数には影響していると考ええる。

この文末カの自問への偏りは、カが疑問詞疑問文に使われ始める近松浄瑠璃から見られるので、元は肯否疑問文で起こったと考えられる。しかし、中世までの疑問標識の分布を調べた衣畑 (2014) によると、肯否疑問文で使われる文末カに質問か自問かによって、用例の偏りは認められない。講義録である『史記抄』では「自問」の例しか見られず (93 例)、対話劇である虎明狂言では大きく「質問」に偏る (質問 124 対自問 13) というように、資料の性質が用例数を大きく左右している。では、この変化は近世の初期に肯否疑問文に起こり、近世期には、文末カを持つ肯否疑問文も、疑問詞疑問文と同様に自問に偏るのだろうか。しかしそこには難しい問題がある。

まず1つは資料の問題であり、カが肯否疑問文で自問に偏ることを示すためには、質問でカが用いられにくくなることを示さなければならない。しかし、近世の資料は書記言語でありかつ疑問符もないため、疑問詞のない文が疑問文 (肯否疑問文) であることを示すためには、疑問助詞が必要になる可能性が高く、よって、資料の上からカが質問に使われにくくなることを示すのが難しい。

さらに、そもそも、現代共通語においても文末のカが質問の文脈で全く使えないわけではない、とい

う問題がある。(14)は力がないほうが自然ではあるが、文法的に不適格とは言えない。

(14) (あなたは) 蕎麦を食べるの (? か) ? (= (2-a))

だとすると、上の資料の性質と合わせて、近世の資料にも質問の力が多く現れることが予測される。

以上のような問題があるにもかかわらず、近世初期に文末力が＜問かけ性＞を失ったとするのには、2つの根拠がある。1つは、肯否疑問文の力も、疑問詞疑問文に用いられる力と無関係ではなかったと考えられることである。(2-b)を見ても、疑問詞疑問文と肯否疑問文で文末力の自然さは変わらない。よって、肯否疑問文においても＜問かけ性＞を失う変化が起きていたと想定するのが自然である。

2つ目の根拠は(14)の力の意味的性質にある。力がある場合には、話し手は「聞き手は蕎麦を食べるだろう」というバイアスを持ち、それを聞き手に確認しているように感じられる。実際、話し手側に答えへのバイアスが想定しにくい選択疑問文にすると、力の許容度は著しく落ちる。

(15) (あなたは) 蕎麦を食べるの (*か) ? それともうどんを食べるの (*か) ?

そこで(14)のような力を「確認の力」と呼ぼう。この力が確認を表すのに使われていると考えれば、なぜ質問で力が肯否疑問文に使えて疑問詞疑問文に使えないかもうまく説明できる。疑問詞疑問文では疑問詞の作る「変数」の値が埋められず、確認するための命題が作れないからである。その点、「自問」で使われている力は「確認の力」ではありえない。よって現代共通語では疑問文で使われる力に（少なくとも）2種類あり、「確認の力」を別にすれば、疑問文において力は＜問かけ性＞がない場合に使われているということになる。これは、歴史のある時点で確認の力と、＜問かけ性＞のない力が発生したことを意味し、よって、肯否疑問文においても＜問かけ性＞を失う(13)の変化が起きたことになる。

この変化によって文末力が[－問かけ]という意味を持つ形態素として再分析され、力は[－問かけ]であれば、肯否疑問文だけでなく、疑問詞疑問文にも使われるようになっていったと考えられる*8。

(16) [－WH] > [±WH]

6 おわりに

現代共通語の力は、肯否疑問文では質問にも自問にも使うことができる。しかし、5節で論じたように、質問に力が使われる場合はバイアスを持って聞き手に確認する意味になる。この「確認の力」を除くと、現代共通語の力は＜問かけ性＞がない場合にのみ使われる。日本語疑問文の疑問標識が、中世末まで、疑問詞疑問文と肯否疑問文を区別する形で整理されていたとすれば(衣畑 2014)、＜問かけ性＞を失って「自問」に偏り([±問かけ] > [－問かけ])、疑問詞疑問文と肯否疑問文を区別しなくなる変化([－WH] > [±WH])は、日本語疑問文の体系に大きな変化をもたらしたと言える。

参考文献

- Aitchison, Jean (1991) *Language change: progress or decay?*, Cambridge: Cambridge University Press.
R core team (2019) R: A Language and Environment for Statistical Computing. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria, <https://www.R-project.org/>.
小野葉子 (1998) 『春色梅児誉美』の疑問表現—「問かけ」と「疑い」の形式の交渉—, 『青山語文』 28: 138–150.
衣畑智秀 (2014) 「日本語疑問文の歴史変化—上代から中世—」, 青木博史他 (編) 『日本語文法史研究 2』, ひつじ書房, 61–80.
衣畑智秀 (2021) 「間接疑問文発達の一過程—日本語史を中心に—」, 筑紫日本語研究会 (編) 『筑紫語学論叢 3』, 風間書房.
阪倉篤義 (1993) 『日本語表現の流れ』, 岩波書店.
清水登 (1995) 「疑問表現について—院政期から室町期までの表現と主格助詞の用法をめぐって—」, 『長野県短期大学紀要』 50: 183–194.
竹村明日香・金水敏 (2014) 「中世日本語資料の疑問文—疑問詞疑問文と文末助詞との相関—」, 『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究研究報告書 (1)』, 国立国語研究所, 3–20.
堀崎葉子 (1995) 「江戸語の疑問表現体系について—終助詞カシラの原型を含む疑い表現を中心に—」, 『青山語文』, 25: 1–11.
山口堯二 (1990) 『日本語疑問表現通史』, 明治書院.
横山詔一・真田治子 (2007) 「多変量 S 字カーブによる言語変化の解析」, 『計量国語学』, 26(3), 79–93.

*8 詳しくは別に論じたいが、この変化は文末力に先んじてヤラにも起きたと考えられる。ヤラの語源である係助詞やは肯否疑問文に使われたが、ヤラは疑問詞疑問文にも使われ、間接疑問節を表示する用法も見られる(衣畑 2021, 3.1 節)。